

# 「海棠目白図」（泉屋博古館所蔵）の想定復元模写及び装潢

博士前期課程 日本画領域 森下 麻子

## 《原本について》

伊藤若冲 絹本着彩 縦 139.0×横 78.9cm 1749（延享4）～1756（宝暦6）年頃 泉屋博古館所蔵

伊藤若冲（1716～1800）は京都錦小路の青物問屋「<sup>ますげん</sup>枅源」の長男として生まれ、数え年 23 歳で家業を継ぐが、40 歳で次弟に譲り画業に専念するようになる。当時から名の知れた画師であり、狩野派を学び、さらに中国・朝鮮花鳥画のひたむきな模写を通じて独自の画風を確立させた。

本作品は、伊藤若冲が 42 歳から 10 年の歳月をかけて描いた大作「<sup>どうしよくさいえ</sup>動植綵繪」にとりかかる直前の作品で、海棠とコブシの白い花が咲き誇る春の日に、枝に留まる目白たちが描かれている。鮮やかな色彩が残るものの、印象的な目白の目やコブシの花の胡粉、緑青色の草など、絵具の厚く塗られた箇所には剥落がある。

本研究では、絵画の印象を取り戻し、隅々まで描きつめられた細密表現を実感するため、想定復元模写で剥落箇所の復元を行う。さらにオリジナルの制作過程を辿ることで、若冲の作品に対する理解を一層深めていくことを目的とする。ただし、原本の印象を損ねないよう、彩色は古色をつけて行う。

## 《模写の工程》

1. 熟覧 実物を見ることにより（熟覧）、色味や細部の判断、絵の具の特定、絵の具の塗り厚等の観察を行う。カラー写真から想定した色見本（彩色カード）や絵絹と原本を比較し、正確な色味を記録する。（図 1,2）



図 1 彩色カード



図 2 熟覧風景

2. 下図 ロール石州紙にドーサ引き（滲み止め）をし、原寸大カラー写真の上に置き、墨線で筆の入りや抜け、抑揚などの線の印象を意識して写し取る。（図 3,4）



図 3 コブシの上げ写し



図 5 復元作業

3. 基底材の準備 原本の絹に近づけるため、原本の絹目に近い絹（手織り機械織り絹）を使用し、矢車染料で染色をし古色付けをする。

六時間砧打ちをして画面を平滑にし、滲み止めとしてドーサを表裏 1 回ずつ引き、木枠に絹を張り込む。

4. 復元案 原本の剥落箇所を再現する。原本に残された絵の具と同時期の作例から推測し手板に復元案を制作、熟覧時に比較して復元案を決定した。（図 5）

5. 線描き 線の印象を原本に合わせ、強弱に気を付けながら描き進める。

6. 彩色 熟覧時の資料を元に、白緑や朱など、江戸時代にも使われ現在も入手できる天然絵具を使用して彩色を行う。（図 6）



図 4 下図



図 6 彩色途中



図 7 仕上げ前

7. 仕上げ 矢車と墨を混合した染料で染色した肌裏紙を裏打ちし、地色を合わせた後、全体のバランスを見ながら細部を描き進めていく。（図 7）

8. 装潢 作品に合った<sup>きれ</sup>裂を選び、和額装に仕上げる。原本は掛け軸であるが、今後の扱いや展示上の環境を考慮して、本制作では和額装にした。

## 《まとめ》

本作品は、カラー写真では色彩をおさえた平面的な印象を受けるが、原本は絵具の発色や強弱関係によって、奥行き感が巧みに表現されていた。また海棠の花とコブシの花、海棠の葉と目白など、同系統の色彩が続いても、暈しの違いや線描きの変化によって計画的に描き分けられ、単調さを排しており、それらのことを特に重視して描写を心掛けた。

復元作業を通して、どのモチーフも同価値として細密描写が施されていることを感じ、細密描写が装飾性だけでなく、その物の質感まで表現していたことに感銘を受けた。生きる物、全てのものを同価値として描き切り、若冲の徹底された造形技術が、細部にまで渡っていることを一層実感することが出来た。